

2019年度 FIT 草木染塾 第3回

開催日 : 6月17日(月) 9:30~15:30

場所 : 川崎市黒川青少年野外センター

講師 : 奥村具子 助講師 : 中野修平、矢吹佳枝

受講者 : 3名 田川裕則、入江克昌、岡部桂子

1. 座学 民衆の衣料の歴史

午前の前半は「古代の日本人(民衆)は何を着ていたのか」について学びました。

古代遺跡からむしろやすだれのように編んだ布片、縄文時代にはすでに染めた絹・大麻を織機で織っていた様子出土品がある。戦国時代に木綿が入って来るまでは、主に苧麻(カラムシ)と絹を生産し利用していた。民衆は苧麻を着ていた。苧麻は育てやすく強い繊維だが、硬くて保温性がなく、繊維にするまでに手間がかかる。また織るのにも時間がかかった。

木綿は麻に比べて肌触りが良く、保温性に優れ、染まりやすという優れたものだが、民衆に普及するのは国内で栽培され、生産が分業化し大量生産されるようになる江戸時代からである。織機の発達で速く織れるようになったことも普及の要素である。元禄文化が花開き、町人も型染の木綿衣料を使用するようになった。

今は簡単に衣服が手に入る時代ですが、繊維を植物から採取して布にして着るといふことの大変さを考えると、古代人の知恵と努力の偉大さを感じました。

2. 実習 赤系の染め

(1) アカネ 木綿のバンダナ 板締め模様

インド茜を使用(乾燥した根を裁断したもの)

- ・染めるバンダナを好きな蛇腹折りにして、板締めにしておく。
- ・30の水に対して4%酢酸(食酢と同じ濃度)を15ml加え20分煮出す。
- ・赤系の染色液は、バケツ返しをして空気を入れると赤みが増す。(一晩置いてもよい。)

【バケツ返しとは、液が空気に触れるようするために2個のバケツで液を何回も入れ替えること】

- ・2番液を同じように水から煮出し、バケツ返しを行う。
- ・1番液と2番液を混ぜる。
- ・ミョウバン媒染液と鉄媒染液を作る。
- ・板締めしたバンダナを染液—水洗い—ミョウバン媒染液—水洗い—染液・・・を繰り返して好みの濃さまで染める。
- ・板締めの板を外して、板を違う箇所に締め直す。

- ・今度は、染液—水洗い—鉄媒染液—水洗い—染液・・・で、好みの濃さまでこれを繰り返す。
- ・板締めめの板を取って水洗いして干す。完成

(2) ヤブマオ レーヨンのストール 無媒染

ヤブマオ 葉と枝を裁断

- ・ヤブマオ 400 g を水 15ℓ で 20 分煮出す。
- ・バケツ返しを行う。
- ・2 番液を煮出し、バケツ返しを行う。1 番液と同じ色合いになった。
- ・ミョウバン媒染、鉄媒、無媒染の見本染から好きな色とストールの素材を選んで染めることにした。結果、全員がレーヨン素材のストールで無媒染を選んだ。

今回は、赤系の色は酸化させると赤色が濃くなるのでバケツ返しを行うことを学んだ。また、2 番液、3 番液は水から煮出す。赤色によく染まるには最適な濃度があるので、同じ色合いの液でも黄色に出てしまう。材料を多くして、濃く煮出しても赤が出るわけではない。素材によっては 2 番、3 番液の方が赤く染まるものもある。それぞれの液で違う色が出るなど、奥が深い。

アカネの板締め染めは、予想もしなかった幾何学模様が素敵でした。媒染液の違いの色合いも良かった。

ヤブマオ染めは、薄い小豆色に染まり、無媒染なのに意外とよく染まったと思います。

赤系はソヨゴ、サクラでも出るということなので、機会があれば試したいと思います。

(報告：岡部桂子)

バケツ返し



板締め



板締め作品



ヤブマオ染ストール

